

Photographer 横木安良夫

Getty Imagesの コントリビューターを目指す

第3回

文：
清田真衣子



横木安良夫がGetty イメージズのコントリビューターになるまでに密着する短期集中連載。今回からはGettyで活躍しているフォトグラファーにインタビュー。コントリビューターとしての仕事について、その実際を聞いてみた。

よこぎ・あらお

1975年、フリーランスの写真家として独立。広告、エディトリアル、ファッション、ヌード、ドキュメンタリー、CMと様々なジャンルで活動。2009年よりテレビ朝日「世界の街道をゆく」のスクールとムービーを担当。新しいメディアとしてKindleの電子写真CRPを主催。

CHAPTER 03 ゲットィのコントリビューターに聞く フォトグラファー：渡辺 浩

——今回登場するのは、独学で学んだという3 DCGを駆使してオリジナリティあふれる世界を作り出し続ける渡辺浩さん。Gettyの人気コントリビューターであり、海外の写真賞を数多く受賞している写真作家でもある。

横木 まずフォトグラファーとしての渡辺さんの経歴から教えてください。

渡辺 父が愛知県で写真館をやっている、家業を継ぐつもりで写真を学べる東京工芸大学に進学しました。結局写真館は継がず、卒業してすぐに資生堂にカメラアシスタントとして入社。資生堂では商品撮影からビューティ、ファッションショーの写真も撮っていました。契約社員として5年ほど所属した後、フリーランスのフォトグラファーになりました。

横木 では、キャリアのスタートは、完全に広告写真だったんですね。

渡辺 でも実は、資生堂にいた頃から広告には向いていないと思っていました。一番やりたかったことは、自分の作品としての写真を撮ることでした。1992年には渋谷PARCOが主催していた第4回「期待される若手写真家20人展」に入賞して個展を開いたりするようになりました。当時はモノクロの花の写真やヌードも撮っていました。

——その後ギャラリーにも所属していた渡辺さんだが、それだけでは食べていけない収入にはならない。作品づくりを続けながらファッション雑誌で化粧品やジュエリーを撮ったり、広告のカタログの物撮りをやっていたという。転機は40歳の時にやってくる。

3DCGで独自の世界を作り出す

渡辺 家庭を持って子どももできたことで今後を考えるようになりました。そこで3 DCGを始めたんです。とはいえ独学なので、営業に行って「3 DCGができます」と言っても先方の依頼内容をすべてできるとは限らない。まずは手探りで自分のできることをやっていた感じです。

横木 当時から今の作品のような感じのものを作り始めたということですね。Gettyとの出会いも、その頃ですか。

渡辺 そうですね。2002年にGetty ジャパンができて、知り合いの方から勧められたことがきっかけです。

横木 ストックフォトに自分の作品を預けることへの抵抗感のようなものはなかったんですか？

渡辺 少しですが他のストックフォトに預けていたことがあったので、それはありませんでした。Gettyにも当初はストレートな風景写真を預けていました。その頃富士山を撮った写真(P 101)は、現在に至るまで一番よく売れています。3 DCGの作品もちょっと入れていましたが、最初は小林さんに見せても「これはやりすぎだよ」と言われたりしていました(笑)。

——Gettyのアートディレクター、小林正明さんが当時の渡辺さんの印象を「肩からカメラを上げて街を撮り歩くフォトグラファーという印象」だったと語るほど、初期は風景写真やスナップショットを含めストレートな写真が多かった。そこからだんだんと作風が弾けていき、あるときか

らイラストとの中間のような、渡辺さん独自のスタイルができあがっていったという。

ひとつの言葉からイメージを広げる

——渡辺さんの加工はコンピューターに限らない。洋服の中に糸で作った内臓があしらわれた写真(P 101)の糸の編み物は、渡辺さんのお手製だという。

横木 日本の写真教育では学べないところだと思いますが、こういったアイデアはどこから出てくるんですか。

渡辺 作ることはもともと好きでした。ストックフォトだったら自分が監督でなんでもできる。それが面白いんです。紙でできた車は、車の写真を撮って、それを紙に

プリントしてまるめたものを撮影しています。自動車保険の会社で使えないかなと思って作りました。アイデアは毎日考えてメモしています。いろんな人の写真を見て参考にしたりもしています。

横木 アイデアっていろんなものを見てインスパイアされますよね。日々どういうものを見ていますか？

渡辺 今はインターネットがほとんどですね。その他は写真集を見たり、またこういうアイデアでやろうと浮かんだら、まずGettyのサイトで他の人がどういふふう撮っているかをリサーチして、被らないようにしています。

——最初にアイデアの元となるような「キーワード」がGettyから示されるというケー

ストレートな風景写真からアイデアを活かした作品へ



© Hiroshi Watanabe_200472698-001_Getty Images



© Hiroshi Watanabe_528912755_Getty Images



© Hiroshi Watanabe_98896873_Getty Images



© Hiroshi Watanabe_111968789_Getty Images



© Hiroshi Watanabe_107149790_Getty Images

左上はいまだに売れ続けているという富士山の写真。当初はこのようなストレートな風景写真やスナップショットを数多く預けていたが、次第に写真と3DCGを融合させた渡辺さん独自の世界が構築されていった。通常、ひとつのアイデアで20〜30点程度のシリーズを制作。厳選された作品がGettyのサイトから世界のマーケットへとアップされる。

スもある。たとえば「サステナビリティ」というキーワードを投げた時に帰ってきたのが、落ち葉に包まれた車の作品 (P 101)。こんな傾向が流行っているという情報に対して、完成されたイメージを、想像するよりずっと面白いものにして返してくるプロデューサーが、渡辺さんのすごいところだと、小林さんは語る。

横木 それはかつてはデザイナーの仕事だったんですね。僕もいろんなアイデアを考えるのが好きなほうなんです。フォトグラファーにはそれを見せる場所がなかった。得手不得手は写真家のタイプにも寄るでしょう。ビルの上から撮影した人間を並べた写真も面白いですね。これはどのように作ったのですか。

渡辺 まず、ビルの上から歩いている人を望遠レンズで撮ってそれを切り抜いて並

べました。あのくらいの小ささになるとリリースはいりません。影と人は別々に切り抜いて作りました。影には撮影したときの場所の地面が切り取られてしまうので、人物と別に切り抜いて合成しています。このシリーズに関しては、小林さんにアイデアをもらいました。

横木 どのくらいのペースで作品を作られていますか。

渡辺 だいたい月に1回から2回くらいアップしていますが、3DCGのものはすごく時間がかかります。長いと製作に1ヵ月くらいかかってしまうものもあるのですが、月に1回は絶対新作をつくるということは、自分に課しています。常に複数のテーマを走らせて、手間のかかる作品とそうでないものをバランスよくアップするようにしています。

横木 テーマはどのように決めているのですか。

渡辺 「Business」「Technology」「Health」といった得意分野は、やはりアイデアが浮かびやすいです。

——渡辺さんの得意分野の中でも、ビジネスはゲッティでニーズの高い分野だ。海外の紙幣を使ったシリーズは『ニュースウィーク・ジャパン』の表紙になった。ビルを背景にしているスーツ姿の女性の写真は『Fortune』のブックインブック表紙にも使われるなど、人気が高い。

渡辺 『Fortune』の表紙になった写真のモデルは、実は妻なんです。背景は、撮影したビルをフォトショップで加工しています。村上春樹の小説のフランス語版の表紙に使われたのは、娘を撮影しています。

横木 広告では有名人の写真が当たり前

人気の高い写真は世界中で使われる可能性がある



© Hiroshi Watanabe_84911174_Getty Images



村上春樹「国境の南、太陽の西」(フランス語版)の表紙。

© Hiroshi Watanabe_108297872_Getty Images



© Hiroshi Watanabe_92654720_Getty Images



国内外で使われている渡辺さんの作品。左から「ニュースウィーク日本版」、「Fortune」ブックインブックの表紙。

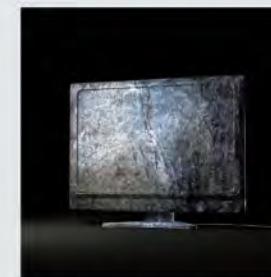


© Hiroshi Watanabe_654400155_Getty Images

左上 "Alien Planet" 2017 American Photography 33 (USA) に選出
 右上 "Meaty Scape" 2016 IPA International Photography Awards (USA) Sony World Photography Awards PX3 Prix de la Photographie Paris (France) 他を受賞
 右下 "If Electricity is Lost" 2012 PDN ANNUAL (USA) London International Creative Competition (UK) 他を受賞



© Hiroshi Watanabe_585210583_Getty Images



© Hiroshi Watanabe_120371622_Getty Images

作家性の強い作品で海外のフォトアワードを受賞

になってきている中で、家族や普通の人をモデルにできるところが、ゲッティの面白さですね。

海外の写真賞を数多く受賞

——現在の仕事は、ほぼゲッティのコントリビューター1本に絞っているという渡辺さんだが、作家性の強い作品は海外の写真賞を毎年のように受賞している。大理石のテクスチャーを貼り付けた家電のシリーズは2012年に「PDN」(米)、「PX3」(仏)、「LiCC」(英)を受賞。2016年にSony world photography awards第3位などを受賞した「ミートスケープ」シリーズは、青空をバックにしたグランドキャニオンを思わせるような赤土の大地が、実はすべて肉で出来ているという驚きの作品。アルミホイルを使った最新シリーズは、2017年AI-AP33WINNERSに選出された。

渡辺 大理石の家電シリーズは「もし電

気がなくなったら」ということをビジュアル化しました。家電製品が石化してなんの意味もなくなってしまふ。そういうことを考えるのが好きなんです。

横木 「ミートスケープ」シリーズは、どこから生まれた発想なのですか。

渡辺 木星の画像を見ていたらすごくお腹が空いていたせいか、木星の地表が肉に見えたんです(笑)。それをいろんなバージョンで作ってみました。これも家電のシリーズと作り方は同じで、形を3DCGで作って、撮影した肉のテクスチャーを貼りこむだけです。最初はペーコンの模様が木星に似ていたのでそこから繋がっていて、ペーコンを他の肉に変えたり、北斎風の富士山は和牛で作ったり。

横木 アルミホイルの作品は、もはやアートですね。大きくプリントすれば作品として充分売れるものになるのではないかと思います。プリントはしないんですか?ゲッティで試作品をつくるうちに、どんどん洗練された

作品ができてくるかもしれない。

渡辺 もう少し作品が溜まったらギャラリーで個展でもやろうかなと思っています。最終的にはそれがいちばんやってみたいですね。

横木 そういう試作のメディアとしてもゲッティはすごく面白いですね。



わたなべ・ひろし
 東京工芸大学卒業後、(株)資生堂入社。1993年独立し雑誌、広告の商品撮影の仕事を経て、2002年頃より3DCGを学び、2006年よりGetty Imagesコントリビューター。3DCGと写真をミックスさせた作品を得意とし、世界のアワードを受賞する。